

もう一度読みたい：過去のインタビュー

「見えない恐怖、プルトニウム社会」 ● 高木仁三郎さん

——プルトニウム社会がやってくるという言葉使いをよく目にしますが、実際それはどういふ社会のことですか？

高木● プルトニウムは高度に秘密にしておかなければならない軍事物質ですから、プルトニウムがある道筋に従って、必ず情報の制限があるということです。労働者や研究者レベルでは、早くから制限がくわえられていて、日常的なレベルで監視されることもあります。ポストによっては一人ではまったく行動できない人もいます。外部の人と接触がある時は、公安の人がついて来ります。

アメリカでは、カレン・シルクウッドという人がプルトニウムを告発しようとしていたら、交通事故にあって亡くなるという事件がありました。その事故はつくられたものだったとされています。日本では、そこまでのことはまだ起こっていないようですけれど。

——「プルトニウム社会」の直接の被害者でもある彼らは、その居心地の悪さをどう受け止めているのでしょうか？

高木● 昔、動燃で事故があった時、色々なもの書いたことがあって、あとから労働組合の人に、「会社のことを悪く言わないでくれ」と言われたことがあります。自分たちの仕事に希望が持たなくなるって言うんです。私は会社の危険性を訴えたのに、労働組合としての自主性が無いから、中から疑問も出てこないんです。

——中の声はうまくつなげないものでしょうか？

高木● 社会的に声ももっとも上がるようになれば、中からも声が出やすくなります。実際プルトニウム利用に疑問を持っている人は、動燃や原子力研究所内部にも多いですから。

次に公には、例えばただの市民が輸送に関して「反対」と言うだけでマークされるとか、色々な形で表れるということです。

あらゆる意味で、プルトニウムは見えない恐怖です。気づいたらすごく汚染されていたとか、原爆が出来ていたとか、気づいたら警察にマークされていたなど、むしろひそかな形で進行してゆくの「プルトニウム社会」ではないでしょうか。

1992年9月15日号 (No.37)

特集「プルトニウムってなに？」

インタビュー by あきこ

「国の安全という言葉信じたらほんとに殺されるよ」 ● 平井憲夫さん

平井● 阪神大震災でも、高速道路を設計した人はよもや橋桁のコンクリートの中にコンパネとかジュースの空き缶が入っているとは思ってない。…あそこで直接コンクリートを流して作っている人はいわゆる世間でいう出稼ぎの人なんだ。お百姓さんなんかね。原子力発電所でも同じような出稼ぎの人が仕事してる。だから体質は一緒。それに今の監督いうのも、自分でやってみせる技量がないわけ。私もいっぱい何十人も監督を育てたよ。でも70年代の終わりから80年代に原発ラッシュで、監督を育てる間がなかったわけ。すると素人のまんま各現場に行かせるでしょ。だから素人が寄ってたかって作っているのが原発だよって私は言うんです。…70年代の終わり頃から82～83年頃に作られたやつはね。もう地震ではもたないもん。

——原発はどんな地震にも絶対安全ですってよくPRしてますけどね。

平井● それは原子炉のことなの。私が言うのは原子炉がもって配管がもたないよいうんです。配管が破断したら、もうこれは制御きかないんだから。まったくそれが美浜の原発事故だったわけよ。…みんな原子炉ばかり言ってるけど、そうじゃないのよ。車で例えるとね、ブレーキはしっかりしていても、そのブレーキへ行く途中のオイルのパイプが切れた場合は、もうブレーキ利きやしないんだから。

——そういうごまかしやウソが原子力行政には多いですね。…

平井● それは私もいっぱいウソをついてきたから。働いてる労働者に、国の許容線量さえ守ってれば、ガンになる白血病になるというのは大ウソだよと。あんなのは原発反対グループが言ってることだよと。いうんで、自分が20年間やってきたんだもの。でも知ってたんだよ、おれは。ガンにも白血病にもなるいうんは。

原子力発電所いうのはね、新規立地の所へは、いわゆる地域の発展と雇用の促進をうたい文句にしてるわけ。すると被曝するというのが世間に出ると、雇用の促進にならないでしょ。だからそれは絶対に外に出せないわけ。そして私なんか孫請けの人間が、通常の500倍の被曝をしたわけよ。それでも本人には知らせないからね。

1996年4月1日号 (No.72)

「ポンコツ原発の時代」 ● 田中三彦さん

田中● この間、福島第二原発の3号炉のポンプがこわれちゃったね。溶接部がこわれて軸受リングがやられちゃったでしょ。それで原因は溶接部だと言ってるけど、僕はウソだと思うわけ。確かに溶接部が悪かったんだけど、そういうことを言っている限りは、やっぱり原発というのは怖い。つまり機械部品というのは、古くなると摩耗していったりもろくなったりしてこわれるのが当たり前なんです。…で、こわれた時にどう対応するかということ、安全システムで考えているわけですが、その時に必ず人間が介入してくるんです。今回の事故の場合…アラームがついているのに止めない。…これが重大事故に至らなかったのは、ほんとに運が良かったからに過ぎないんです。今回の事故で腹立たしいのは、日頃彼らは多重防護だとか二重三重の安全システムがあるとか、訓練を積んだ優秀な運転員がやっているのにスリーマイルやチェルノブイリとは違うんだと言ってきたのに、そのどれもが機能しなかったことです。アラームが出ているのにきちんと対応しないで無視する。今まで言われてきたことは全部ウソだったんです。

田中● 電力会社っていうのは、電気を売る会社なんです。つまり飛行機で言うとパイロットは飛ばし方のことはよく知っているけど、どうして飛行機が飛ぶのかってことは知らないわけです。車でも、やたら運転はうまいけどパンク一つ直せないとかね。それで老朽化した飛行機を酷使するから、壁がはがれて乗客が落ちたりするんです。あれは中古機を飛ばすことがどれくらい危ないのか、パイロットや航空会社がよく分かっていないということです。で、原発のポンプの振動が大きくなりはじめたってことになると、ポンプの設計技師なんかはもう真っ青になると思うんだけど、運転員はそんなに危険を実感として持てなかったんだと思います。でもこれからどんどん原発が中古になり老朽化していく時代になってきて、ハードウェアをよく知っている専門家が電力会社にいないと非常に危ないですね。いつか緊急事態が発生して、東電なら福島で大パニックになった時に、ハードの知識を持ってる人が誰もいないというのが一番恐ろしいわけです。

1989年4月号 (No.3)